

受講ノート 2016 From 藤由美の Facebook
アンドレア師のキリスト教美術史講座
In 船橋学習センター「ガリラヤ」

2016. 1. 20

今日（1/20）午前中は、船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア・レンボ師の美術講座が再開、2016 年から始まった「ルネサンスの思想-バチカン宮殿のラファエロの間（1）」を聴講してきました。

まずは、シチリア王フェデリコ 2 世（1194~250 年）のナポリ大学の創設など、イタリアを巡る歴史的な社会背景からスタートし、文学ではダンテの神曲、建築ではブルネスキのフィレンツェ大聖堂のドームの完成があり、「人間はあらゆるものになる可能性を持っている」という中世と異なる人間観と新しい神学が生まれ、人間の意思の尊重のもと、あらゆるジャンルで才能が開花されていく過程が絵や建築物で紹介されました。

科学と芸術の統合といわれるレオナルド・ダビンチによる『ウィトルウィウスの人体図』の意味は、身体は神よりの完璧な創造であることであり、それに基づく人間のプロポーションの原則は、建築構造のバランス感覚に反映していて、ドナト・ブラマンテによるサン・ピエトロ・イン・モンテリオ教会の中庭にあるテンピエットはその傑作とのことです。

ルネッサンスの絵画では、イコンのもつ制約から解放されて、人体の自然な動き、風俗、遠近法による当時の日常の背景の絵画となっていく過程が、フラ・アンジェリコの『受胎告知』、レオナルド・ダビンチの『聖アンナと聖母子』、パオロ・ウッチェロの『キリストの鞭打ち』、ラファエロの「聖母の結婚」の作品を例に、具体的に説明してくださいました。

最後に今回の講座シリーズの対象となるバチカ

ン宮殿のラファエロの間についてのガイダンスがありました。

今日は、船橋も寒風の吹く寒い日でしたが、アンドレア師の熱の入った講義に身も心も温くなりました。



ドナト・ブラマンテによるサン・ピエトロ・イン・モンテリオ教会の中庭にあるテンピエット
ラファエロの「聖母の結婚」の背景に描かれているのは、これ。



左から、ドナテッロ（ルネサンス初期）、ミケランジェロ、ベルニーニ（バロック期）のダビデ像



今日の「ガリラヤ」でのアンドレア師の講座で、ルネサンスの初期・盛期・バロック期のダビデ像彫刻を例に、それぞれの特徴を説明されたのは、とてもわかりやすかったです。

復習を兼ねて、ドナテッロ（ルネサンス初期）、ミケランジェロ、ベルニーニ（バロック期）の有名なダビデ像をネットから写真をいただき、並べてみました。

バロックの動きのある表現は、観るものも同じ作品の一部となるような感覚がするとのこと



2016.2.3

今日(2/3)は、先月 20 日に引き続き、船橋学習センター「ガリラヤ」で、アンドレア・レンボ師の美術講座「ルネサンスの思想-バチカン宮殿のラファエロの間(2)」を聴講しました。

ラファエロの間は、教皇ユリウス 2 世により、ラファエロが壁画を依頼されて制作したバチカン宮殿の 4 室で、「コンスタンティヌスの間」、「ヘリオドロスの間」、「署名の間」、「ボルゴの火災の間」とよばれています。

ラファエロの工房組織を率いてこの部屋の壁画制作をしていた頃は、ミケランジェロがシスティーナ礼拝堂壁画を制作していて、ラファエロはその作業中の作品を見る機会があり、ミケランジェロに学んだ作風も垣間見られます。

「コンスタンティヌスの間」の絵のテーマは、異教徒に対するキリスト教の戦いと勝利の歴史画で、神の世界と人間の世界が区別されて対応するよう描かれている点が、すべて神の世界であった中世画と違う点だそうです。

完成はラファエロが 37 歳で没した 1520 年以後で、工房の画家たちによるとのこと。

一方、1514年完成の「ヘリオドロスの間」は、神が何世紀にもわたって教会の頭である教皇の立場を守ったという事績を、4枚の壁画と天井画で表現されています。

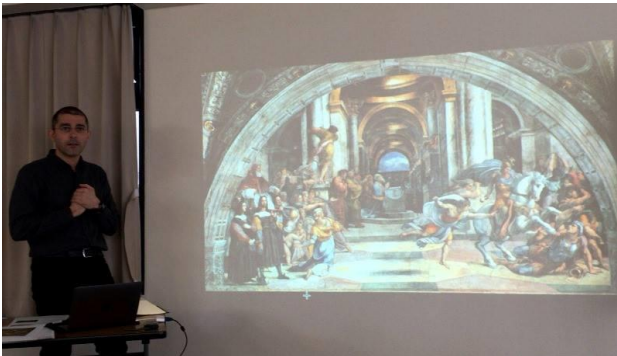
その中でも、「聖ペテロの放免」の絵は、『使徒言行録』第12章にかかれた光景を、窓上の空間に、巧みな光りの表現で描いたラファエロの傑作といわれ、後にカラバッチョの作風にも影響を与えているとのこと。

他の二つの間については、次回のお楽しみとなりました。

写真1は「ヘリオドロスの神殿からの追放」で、『マカバイ記』IIの物語の、神殿を荒らすヘリオドロスが打ち負かされるシーンを劇場型に表現している。

写真2は、「聖ペテロの放免」(ネットから拝借しました)

1.



2.



2016.2.18

昨日出られなかったルネッサンス美術講座の要旨を、夫にまとめてもらいました。

藤 俊夫

昨日、カトリック学習センターガリラヤで、アンドレア神父の講座「ルネッサンスの思想—バチカン宮殿のラファエロの間(3)」を聴講しました。体調不良で、受講できなかった妻の代わりに報告です。

ルネッサンスの代表作のひとつ「アテナイの学堂」も描かれている「署名の間」がテーマです。

ラファエロが最初に手がけた部屋ですが、ルネッサンスの思想がまとめられているとのこと、天井画と4つの壁画(「聖体の論議」「パルナツソス山」「アテナイの学堂」「対神徳と法律」)に込められた思想を読み解いていきます。

ユリウス2世の書庫であり、もともとは使徒座署名院最高裁判所が置かれていました。同じ頃、システーナ礼拝堂では、ミケランジェロがシステーナ礼拝堂の天井画を描いていました、ラファエロは、ミケランジェロに対して何らかの劣等感を抱いていたと、アンドレア師は推測されています。例えば、「対神徳と法律」の女性の描き方などにミケランジェロのスタイルが反映されているようです。ちなみに「アテナイの学堂」の中央手前に、左ひじをついている人物がミケランジェロのようです。

ラファエロにとっては、まだ試行錯誤が続く時代だったようで天井画のフレスコ画は古代ローマのスタイルであり、「聖体の論議」はフラアンジェリコの時代のスタイルが踏襲されています。しかし、そこに描かれているのはもはや神の世界に限定されず、上下に分かれているものの、神の栄光に包まれている世界と、人間の政治世界が見てとれるわけです。

「対神徳と法律」の主題を考えるのに、「枢要徳」という古代ギリシャ以来の徳目について学ぶ必要があります。それは、「知恵」「正義」「勇氣」「節制」からなり、天井画の東西南北の女神像は神学、法学、哲学、詩作の象徴であり、その徳は4つの壁画にも対応し

ています。キリスト教は、「対神徳」を加えました。それは信仰・希望・愛です。人間の自然の感情から生まれるのではなく、神が直接与えてくださった徳であり、人は信仰の徳によって神の啓示を信じ、神を所有するという希望を持ち、神のために自分と隣人を愛するのです。

当時の人々が、このような思想を持っていてそれを表現したのだということを読み解きながら鑑賞することが出来るならば、望ましいことですが、通常のガイドの説明は、時には歩きながらですのて!(!)!、実際には落ち着いて鑑賞することはできないようです。事前学習の必要なわけがわかりました。



壁	画像	トンド	画像	正方形	画像	壁	四大
西		知慮 神学		アダムとエバ		聖体の論議	火
南		正義 法学		ソロモンの裁き		対神徳と法律	土
東		勇氣 哲学		第一原因		アテナイの 学堂	水
北		節制 詩作		アポッロと マルチャ		バルナツス 山	空気

歴史徳と学術

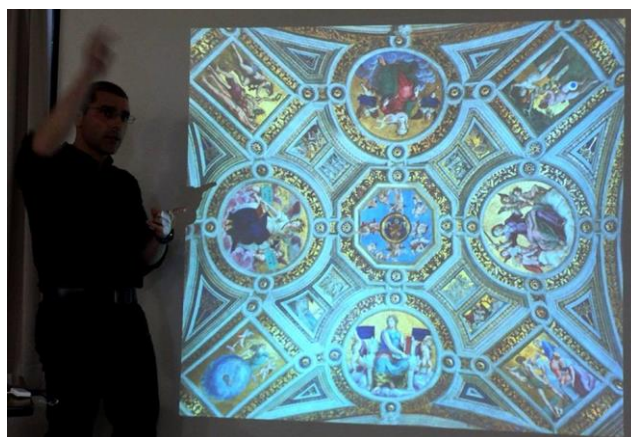
2016.3.3

前回(2/18)はお休みしてしまったアンドレア師の「ルネサンスの思想—バチカン宮殿のラファエロの間」の講座。昨日(3/2)は無事、船橋学習センターガリラヤで聴講できました。

昨日の講座は、「アテナイの学堂」で有名な「署名の間」の天井画から。

四方の円形(トンド)には古代ギリシャの神学、法学、哲学、詩作を象徴する女神像が描かれて、その間の四角形には、神学(知慮)対応して創世記の誘惑される「アダムとエバ」が、法学(正義)には、列王記の「ソロモンの裁き」(コメントに画像)が描かれています。そして哲学(勇氣)を象徴する大壁画「アテナイの学堂」に對面して描かれているのが「聖体の論議」、まさにギリシャ哲学とキリスト教の調和というルネサンス人文主義が一目瞭然に描かれているのですね。

ちょっと面白かったのは、列王記3章の「ソロモンの裁き」の逸話が「大岡裁き」の「子争い」のネタに類似していたこと。中国の古典にもあるようですが、イソップ物語のようにキリシタン文化と一緒に流布したのかもしれないね。





1 人の子を取り合う 2 人の母親を調停するソロモン王の叡智を描く絵



2016.3.16

今日(3/16)は、船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア師の「ルネサンスの思想—バチカン宮殿のラファエロの間」の講座は、今期最終日でしたので、現シリーズの講座の総仕上げとして、昨年公開された映画「ヴァチカン美術館 天国への入り口」を鑑賞しました。

古代ギリシア彫像「ラオコーン群像」からルネッサンス

のミケランジェロ、ラファエロ、バロックのカラヴァッジョ、そして近現代のゴッホ、シャガール、ダリ、フォンターナの聖母像やピエタ、磔刑図などが紹介され、聖なるものを形にしようとする芸術家のあくなき技と苦悩が、「人間とは何か」という深い思索の旅へ誘う作品でした。

午後からは、その実地講座として、国立西洋美術館へ「カラヴァッジョ展」を鑑賞に行きました。

企画展内ロビーの大きなパネル写真の前で記念撮影後、アンドレア師から「エマオの晩餐」のパネルでワンポイント解説があり、入場後は自由見学となりました。

放蕩や罪多き波乱万丈のカラヴァッジョ晩年の「エマオ…」や「マグダラのマリア」などの作品は、天真爛漫な若いころの作品に比して、彼の生涯の中でも静謐で内省的な作品となって、私たちの心にも、深い闇の中の光となって強く迫りくるものがありました。



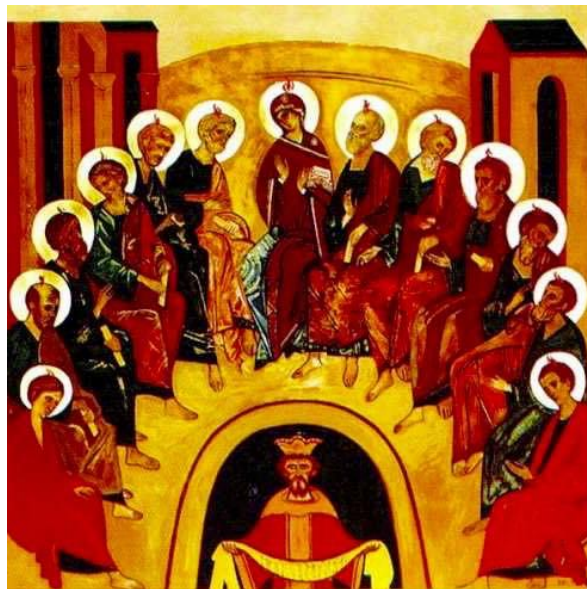
2016.5.18

今日は午前中、船橋学習センターガリラヤでのアンドレア師の講座「新約聖書における聖母マリアとその伝統的な画像」を受講しました。

聖霊降臨を描いた伝統的なイコンの紹介から始まり、フラ・アンジェリコ、エルグレコ、サルバドールダリの作品に込められた神学的な意味に深く感銘しました。



マリアが「神の母」として中央に描かれ、聖霊は舌のような炎で表現されている。(こちらの方が時代が下る?)



フラ・アンジェリコ作品、建物の二階の聖母と弟子達の構図や表情はイコン風でかたい。外のこの絵の依頼者像は、対照的な世俗的社会に描かれている。

伝統的なイコンの聖霊降臨、聖母は描かれていない。聖霊は、建物の上にかかる赤い布で表現されている。



エルグレコの「聖霊降臨」



サルバドール・ダリの作品受難・復活・昇天・聖霊降臨の総合的な構図はすごい！同じくダリの聖母被昇天像



サルバドール・ダリの清楚な聖母像同じくダリの聖母被昇天像



同じくダリの聖母被昇天像



習志野教会の影絵の新作の「聖霊降臨」、福音の意味がよく表現されていると評価されていました。



2016.7.7

今日(7/6)午前中は船橋学習センターガリラヤでのアンドレア師の講座「聖書における聖母マリアとその伝統的な画像」の2回目を受講しました。

今日の講義は、まず新約4福音書の成立のプロセスから。ルカ伝以外は、洗礼者ヨハネによるイエスの受洗から始まる。ルカ伝も、このイエスの受洗の3章から書き進め、使徒言行録を完成の後、1~2章を加えたと推定される。冒頭の「著者の序」では、正確に調査して順序立てて書いたと記されており、1~2章には、他の福音書にはない洗礼者ヨハネとイエスの誕生が、「ザカリア(ヨハネの父)へのお告げ」から始まって、イエスの母マリアへの受胎告知や降誕、聖家族の姿が述べられている。

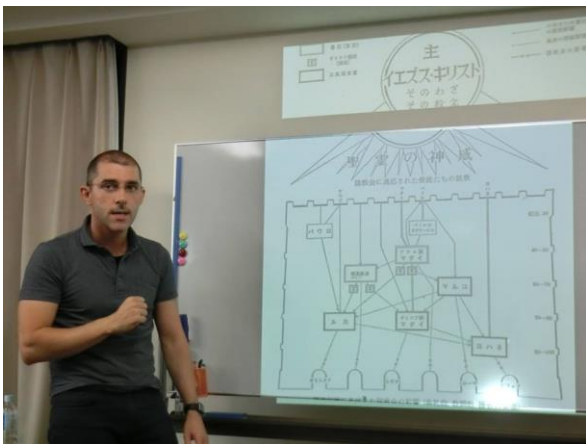
アンドレア師によれば、直接イエスと接したことがなかったルカは、パウロに従い、そしてエフェソに逃れていた福音者ヨハネとイエスの母マリアと接点を持ち、初代教会に伝えられたさまざまな口伝やメモをもとに、流ちょうなギリシャ語の福音書を完成させたとのことでした。

初代教会でのマリアの姿、特に受胎告知は重要で、東方教会のアルメニアの福音によるモザイク画には、「真昼に井戸へ水を汲みに来たマリアに後ろから天使が声をかける」という場面が描かれている。ルカ伝の受胎告知の叙述とは相違するが、アルメニアには、ヨハネ伝 4 章の「イエスが正午ごろ井戸で水を請う」という叙述に類似した形で伝承されてきたらしいとのこと。

また 2 世紀の初めの頃のローマのプリシーラのカタコンベには、王座に座る女性に対し、雄弁家のスタイルでお知らせを告げるローマらしい図像があり、その周りの三重の輪は三位一体を表しているそうです。

ローマの聖ヨハネとパウロ教会の壁画では、お告げがカーテンを開けるマリアの図像で描かれているのは、キリスト受難の際に神殿の幕が下から裂けたことの意味を示し、隔てがなくなって至聖所(=神の住まい)がマリアにより人類のものになったという神学的な意味に基づくとのこと。

時代は飛んで現代。今、評判が高いマルコ・イヴァン・ルプニク の作品も紹介され、それは、これらの伝統的な図像をよく踏まえているそうです。

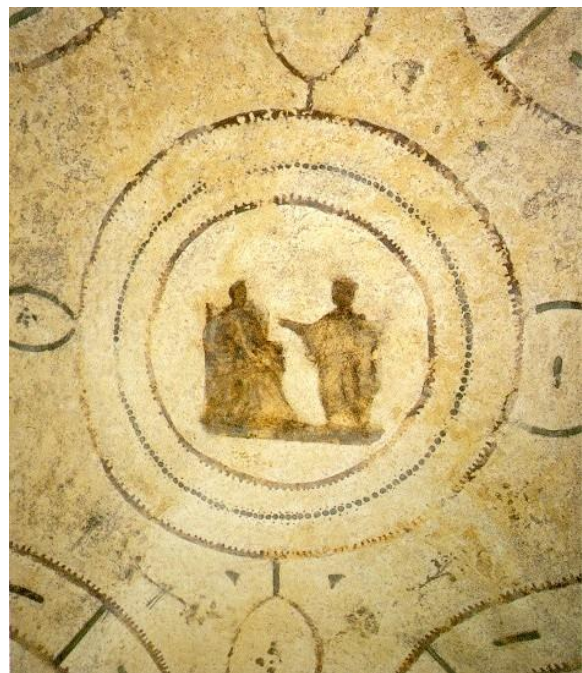


アルメニアの福音によるモザイク画
ルカ伝の受胎告知の叙述とは異なる「真昼に井戸へ水を汲みに来たマリアに後ろから天使が声をかける」という場面が描かれている。

1. 東方教会 (アルメニアの福音のお告げ)

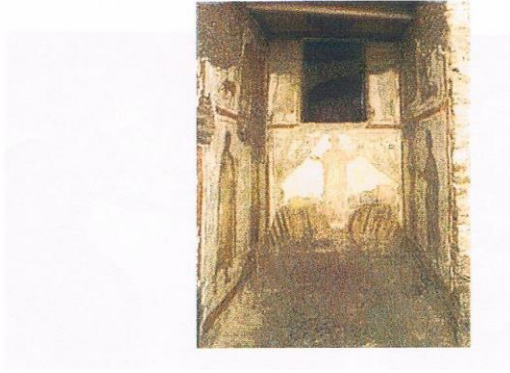


2 世紀の初めの頃のローマのプリシーラのカタコンベの図像「受胎告知」



初代教会の伝承による「カーテンを開けるマリア」の 図像

3。ローマの聖ヨハネとパウロ教会



現代のマルコ・イヴァン・ルプニックの作品



2016.7.20

今日(7/20)は、アンドレア師の講座「聖書における聖母マリアとその伝統的な画像」の3回目を、船橋学習センターガリラヤで受講しました。

講義では、前回(7/6)の続きで、受胎告知の場面を描いた古代から中世初期の図像とその変化を通じて、マリアの姿とその意味を初期教会がどのように理解していたかが、解きあかされました。

古代の図像は、ルカ伝の記述のほか、一部が外伝として残っている初期教会の伝承やユダヤ教(旧約)の伝統を反映していて、アルメリアのモザイク画では、井戸に水をくみに来たマリアに天使が声をかける場面として描かれ、井戸はユダヤの風習で婚約を行う場所であり、神との契約の場のシンボルとのこと。(砂漠地帯で井戸を掘るには、部族・民族の共同作業が必須で、その異部族間の協力の証として、井戸で男女の婚約がなされた)

古代ローマの図像では、王座に座る貴婦人に天使が告知するシンプルなカタコンベのフレスコ画から、5世紀建立のサンタマリア・マジョーレ教会のモザイク画、7世紀の彫刻まで、いずれもマリアは左側の椅子に掛けて、右側から天使がお告げをするスタイル。

それが中世の初めの絵では、マリアは右側に立ち、左から天使がお告げをする形に変わる。その理由は、教会での言語が、右から書くヘブライ語・アラマイ語から、左から書くギリシャ語・ラテン語に変わり、絵の表現も左から進めるように変わったからとのこと。(そういえば、日本の絵巻物も右から左に展開していきますね)

中世以前の絵画でのマリアの徴は、神殿(至聖所の幕を開け、神の住処との隔たりをなくした)、赤い毛糸を編むしぐさ(胎内でイエスの体を紡ぎだす)、王座(来るべき主の座)など。ダヴィンチなどルネッサンス期の受胎告知の絵画にはない徴もあり、初代教会が理解した神学的な意味がわかりました。

また、創世記3章の失樂園(蛇に唆されたアダムとエバが、神の禁を破って「善悪の知識の実」を食べ、最終的にエデンの園を追放される)と、ヨハネ黙示録

12章の「女と竜」の記述を読み解き、さらに、ルネッサンス以後のカラバッチョの絵の解説をお聴きしました。

イタリアのボルゲーゼ美術館のカラバッチョの蛇を踏む聖母子像では、創世記3章の記述通り、ヘビを踏むのは創世記3-15の「女の子孫」=イエス。母マリアは、こわごわヘビを踏む幼子を支えています。左に立つ老女を、生きるものすべての母エバであり、マリアの母のアンナではないと、アンドレア師は、カラバッチョの思想から推測されるとのことでした。

東方教会（アルメリアの福音のお告げ）井戸で振り向くマリア・右上に現れる天使・神殿と布



7世紀の彫刻建物(神殿)を背景に王座に座るマリア、右手に編み物の道具?を持つ。天使は右側から、マリアに語りかける。



ローマのサンタマ王リアマジョーレ教会モザイク画
ローマ風の神殿と貴婦人、たくさんの天使、お告げは右上から。聖霊を表す鳩。貴婦人は赤い毛糸を編んでいる。



中世初めの受胎告知画像左からお告げをする天使。天使の右手はアイコンに描かれる三位一体の形を示す。右側に立つマリア。左手は驚きと謙遜、右手は受諾を表す。この頃から、左から書く言語(ギリシヤ・ローマ)に合わせたスタイルがメジャーになる。



バロック期のカラバッチョの聖母子像

光りが左上から聖母子とヘビを映し出す。
こわごわ蛇を踏む幼子を支え、自分の足を幼子の足の下にそえてさした母。創世記3-15は、「女の子孫が、…お前の頭を踏みつけ」と記す。右で見守るのは、「人類の母エバ」というのが、アンドレ師の解釈です。



6月12日、ボルゲーゼ美術館で撮影カラバッチョ「馬丁たちの聖母」(馬丁組合の依頼で制作したのでそう呼ばれる)



2016. 9. 21

今日(9/21)午前中は、船橋学習センターガリラヤでアンドレ師の講座「聖書における聖母マリアとその伝統的な画像」の4回目を受講しました。

夏休みを挟んでの2か月ぶりの授業で、今日の前半はルカ伝以外のヨハネやマタイ福音書が、マリアとイエスの誕生について。

ヨハネ伝から「女が子を産む場合・・・、子を産んでしまえば、もはやその苦しみをおぼえてはいない。ひとりの人がこの世に生れた、という喜びがあるためである。」

「神を見た者はまだひとりもない」

「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。」

マタイ福音書から「ごらんなさい。・・・天にいますわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである」

人びとの交流とその関係性の中に、神の姿が現れるということ、そして家族(母=マリア)は血のつながりではなく、神の言葉を聞いて行う人のことであるという、アンドレ師のお話でした。

後半は、10~14世紀の絵画にみる受胎告知について、マリアの聖性や天使の描かれ方に中世神学のその時代的な特徴がある一方、ジョットの1305年スクロヴェーニ礼拝堂の絵には、当時の屋敷の日常的なたたずまいに、イコンの制約から解放された自然な姿のマリアが描かれていることなど興味深かったです。

左に天使、右は人間、真ん中の聖母は普通の人ではない特別な存在に描かれている。



10世紀、典礼書、ドイツ

11世紀のスペインの聖書の絵。十字軍の騎士のような天使が持つのは、ベクルスの杖（司教や教皇が持つ司牧を表す杖）



ジョットの受胎告知 日常風景の中に当時の服装の姿のマリアが描かれている。



スクロヴェーニ礼拝堂, 1305 Giotto

聖霊を表す鳩と生まれる直前のような体のイエスが、受胎告知の段階でマリアに宿るという絵。

中世はこんな「トンデモ」説もあったようです。

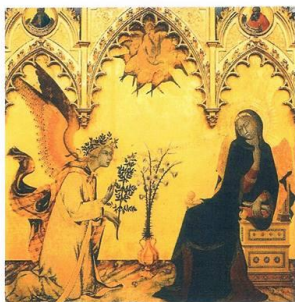


14世紀 Anna di Bretagnaの教会の祈りの書

4. 天使の顔



1344, Ambrogio Lorenzetti, Siena



1333, Simone Martini/Lippo Memmi

2016. 11. 2

今日（11/2）は、船橋学習センター「ガリラヤ」で、久しぶりにアンドレア師の美術講座があり、行ってきました。

今回の講座は、今、国立新美術館で開催されている「ダリ展」の鑑賞のためのレクチャーを中心に、前半は、ダリの生涯と作品のその一見難解なシュルレアリスムの作品を見る視点を教えていただきました。そして後半は、1950年代からの宗教芸術の紹介と、その奥義に触れていただきました。

今日の午後からのダリ展鑑賞会は、締め切り間際原稿作成があつて、私は参加しませんでした、会期中には、見に行きたいと思っています。

ダリが17歳の時の「ラファエロ風の首をした自画像」

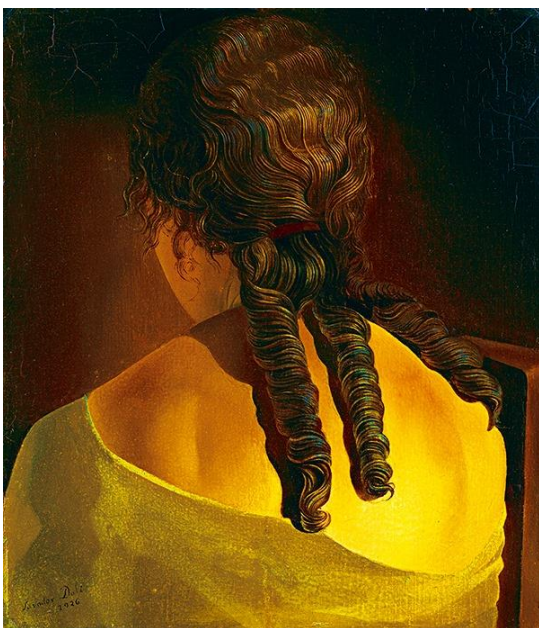
「ラファエロの聖母の最高速度」

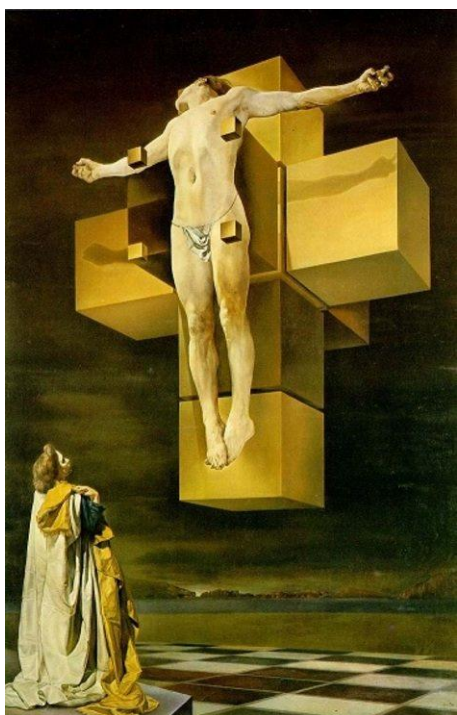


「少女の後ろ姿」22歳の時の作品



ポルト・リガトの聖母





2016. 11. 16

今日（11/16）午前中は、船橋学習センターガリラヤで、アンドレア師の「新約聖書における聖母マリアとその伝統的な画像」の講座を受講しました。まずは、旧約聖書の創世記2～3章の朗読と解説から。

善悪の知識の木の実をアダム（＝地・人間の意）とエバ（＝生命）が善悪の知識の木の実を食べて裸であることを恥ずかしいことと知り、女には産みの苦しみの痛み、人には土から糧を得る労苦が与えられたという叙述は、これが書かれた当時（ソロモンの時代）の現実を反映していること。アウグスティヌスはこれを原罪として定義したが、聖書ではそうは述べていないことなど、お聴きました。

フラ・アンジェリコの子の受胎告知では、左側に園を出ていく二人が描かれているが、その二人を守るような天使と、イエスのエルサレム入城で打ち振られる棕櫚の木が受難と救済のシンボルとして描かれている。

マリアと天使の姿と建物、イコンとは異なるルネッサンス初期の当時の日常生活が反映されて

いる。

天井とマリアの衣の青は、ジョットの青、また中央奥の空の室内は、マリアの何も無い無垢の心の象徴だそうです。

その他、ルネッサンス期の受胎告知の代表作、ダヴィンチとボッティチェリの作品の解説があり、よりリアルな日常生活や人間らしさが描かれるようになり、最終的にカラバッジョの作品に収束するとのことでした。



フラ・アンジェリコの子の受胎告知 左側の園を出る二人に注目

（Wikipedia からダウンロードした画像です。）



ダヴィンチの子の受胎告知 天使の翼が異常にリアルなのに対し、マリアの右腕が長すぎるなど遠近法はまだ完全でない。